

# 白居易の青年期における選良意識について

——慚愧の表白をめぐる韋應物との對比を通して——

土 谷 彰 男

## 一 緒言

「新樂府」五十首（元和四年・八〇九年ごろ）や「秦中吟」十首（元和五年・八一〇）など、社會現實に對する白居易の意識は、二十九歳のとき進士に及第し（貞元十六

年・八〇〇）、續く吏部の書判拔萃科及第と校書郎着任（同十八・十九年・八〇二・八〇三）、さらに三十五歳にして制舉（才識兼茂明於體用科）に登第する（元和元年・八〇六）といった、いわば官僚制度の階梯を駆け上がる間に蘊釀されたものであり、直後の整屋縣尉の出仕を経て翰林學士・左拾遺および京兆戸曹參軍の期間（元和六年・八一二）に至って、彼の認識は冒頭の二作のうちに投影され開花結實することとなった。これに續く下邳退居から四十四歳のとき太子左

贊善大夫にあつて武元衡の禍を蒙り江州司馬へ左遷する（元和十年・八一五）に及ぶこれら一連の經歷は、ちょうど白居易の青年期に相當する。「兼濟―獨善」あるいは「諷諭―閑適」といった白居易の文學特徴の一極が、この時期に完成されたと見られている時期である。

白居易は青年期の早い時期から、自身は國家の選良たるべき意識を持っていた。進士及第の前後では、その前年の郷試の作である「宣州試射中正鵠賦」（卷三八・2808、貞元十五年・七九九）<sup>①</sup>に弓射の禮を述べるなかで、正しく儀容を整えた者は國家の治用に付されるべきであると説き、また進士及第後、宣歙觀察使（治所は宣州）の崔衍に宛てた投卷である「敘德書情四十韻上宣歙崔中丞」詩（卷十三・0608）では、「身は鄉人の薦を忝なくし、名は國士の推に因

る。提攜すれば善價を増し、拂拭すれば妍姿を長す」と述べ、自身を「善價」「妍姿」に足る人物であるとして、國家に有爲たるべきおのれの才華の輝かしきを誇った。もつとも、貞元十六年の進士科、および元和元年の制舉に應じた際の各々の對策文、さらにこれに「策林七十五編」(卷六二・346-349)を加えれば、それらは天下國家の經綸を縱横に論じたものであり、當時の官僚はまた高度に知的選良であつたことを物語っている。文集卷四七に収める夥しい數に上る翰林制詔は、翰林學士や左拾遺の任にあつて唐王朝の選良としての務めを果たそうとした白居易の、政治的營爲の證左であると言つてよい。

この邊の消息はまた、元和五年(八一〇)三十九歳の時、元稹に宛てた「代書詩一百韻寄微之」詩(卷十三・004)によつて知られる。このうち第七十三句から第一百四句は、元和元年の制舉に應じた際の前後について述べており、そこには「萬言は經濟の略、三道は太平の基」とあるように、應舉に際しては選良に足るべき言辭を用意したものであつたことが分かる。制舉登科を経て、元稹は左拾遺、白居易は整屋縣尉に登用され、續く元和四年には、かたや監察御史、かたや翰林學士および左拾遺となつた。詩には次

のように見える。

97	既在高科選 還從好爵縻 東垣君諫諍 西邑我驅馳	既在高科の選に在り 還た好爵の縻に従う 東垣 君は諫諍たり 西邑 我は驅馳す
101	再喜登烏府 多慚侍赤墀 官班分内外 遊處遂參差	再び喜ぶ 烏府に登るを 多く慚ず 赤墀に侍るを 官班 内外に分かたれ 遊處 遂に參差たり

制舉に登第後、兩人はそれぞれ官位に繋がれた身(好爵の縻)となつた。「東垣」は『史記』正義に見える語であり、左液のこと。唐代では左拾遺(門下省・從八品上)の職を指し、ここでは雅語美稱によつて元稹の當時の職掌を示した。かたや白居易は「西邑」、すなわち整屋縣尉の職であつた。整屋縣は畿縣であるから正九品下である。制舉登科後の初任より二人の間には品階の高低が歴然としてあつたにも関わらず、「東西」の懸隔のもと交遊が疎遠になるなかで、ここでは國家に有爲たるべき友人元稹に對してひ

とまず慶祝する意を込めたと見たい。續く元和四年（八〇九）に元稹は監察御史の任に着き（烏府に登る、正八品上）、白居易は左拾遺となった（赤墀に侍る）。股肱の臣となるべき友人に對して再度喜びの情を表す一方、自身については「多く慚ず」といった感情を躊躇なく露わにしているのである。

白居易の作品に見える慚愧の念については、彼の文學の基盤をなすものとして、つとに着目されてきた。先行研究においては、花房英樹『白居易研究』をまず採り上げなければならぬ<sup>④</sup>。氏は白居易の文學の基盤のひとつに「慚」を据え、その生涯に互る變遷を通覽し考察を加えた。このうち、青年期に關しては、「觀刈麥」詩（卷一・0006、元和二年・八〇七）や「村居苦寒」詩（卷一・0046、元和八年・八一三）を取り上げ、官位にあつて飢凍を免れている自身を愧らしい自らの存在を問うているとしたうえで、「こうした『愧』は、すでに一個の人間としての意識である」（四〇七頁）と指摘する。さらに、「若い時代には『尸素』（尸位素餐を指す——筆者注）の『愧』を懷き續けた。それは官僚の生活が續く限り、絶えることはなかった」（四一六頁）と述べている。白居易は、政治官僚という謂わば規範集團のうちに

身を置きながら、それに收まらぬ個の意識の搖さぶりを「慚愧」に見出し、また同時にそれを一個人において受け止めようとした。氏の分析は、白居易の文學における慚愧の念とその意義を明確に示すものであり、慚愧の念を表白することにおいて、そこには個我的内發的にして實質的な意識が存在することを確認するものである。

花房氏に續いて、渡邊信一郎氏は花房氏の論考を起點としつつ、歴史社會學の觀點から當時の農村共同體の實體について分析を行い、白居易の慚愧の内實を實證的に考察した<sup>⑤</sup>。そのなかで、慚愧の念について「菲才ながら官人として祿を食み、皇帝の授任に答え（ママ——筆者注）得ない慚と、農民の勤勞・飢寒の辛苦に對峙する祿仕者の慚の意識が區別される」（四頁）と指摘しており、この時代の慚愧の意義を一般化してみせたことにおいて、花房氏よりさらに一歩前進が見られる。さきに見た「多く慚ず 赤墀に侍るを」（代書詩一百韻寄微之）詩の謂は正に前者に屬するものであり、こうした慚愧は「授命者たる皇帝に對する恥であり、唐一代を通じて多くの官人たちが言明している」ものである（三頁）。渡邊氏の論考の主眼は、あくまでも唐代の農村社會の構造と實體について考證を加えようとす

るところにあるが、氏のそれはまた、唐代士大夫官僚の選良意識の構造における慙愧の念の意味を一般化し、この方面の研究の基點をなしたことに於いて、いまなお着目されて然るべきである。

一體、司馬遷が『禮記』『曲禮』を引き「傳に曰く『刑は大夫に上らず』。此れ言うらくは、士節の厲しからざるべからざるなり（傳曰「刑不上大夫」、此言士節不可不厲也）」（『漢書』卷六二、本傳「報任安書」と説いたのは、傳統的な士大夫の意識において、士大夫たることの當爲の無謬性がその前提としてあつたからである。皇帝權力と禮制を政治基盤とする唐王朝にあつて、その選良として國政に與る人物の意識には、當然ながらこの傳統的な士大夫の意識が埋伏していたと見るべきである。かくあればこそ、士大夫たる國家の選良によつて「慙愧の念が表白される」そのこと自體がすでに無謬のものであつたのであり、したがつて、目下の矛盾背馳をこの慙愧の念の下に暫時留保すること、皇帝權力に連なる選良の當爲としてあつたのである。<sup>(6)</sup> 渡邊氏が述べる如く「授命者たる皇帝に對する恥」を「唐一代を通じて多くの官人たちが言明」しなければならなかつたその理由が、正にこの點にある。このことはまた、

後述するように、國家の一選良たる白居易においてさえ、それから免れなかつたことは十分留意されて然るべきである。

本稿は、如上の觀點に立つて、國家の選良たるべき人物が慙愧の念を表白することの當爲性・無謬性において、白居易については確たる選良意識を伴いながら、花房氏の述べる如く慙愧の念に個人の內發的・實質的な意識が付與された、その一連の過程を仔細に觀察しようとするものである。この際、慙愧の念の表白によつて、中唐において士大夫たる選良の當爲性・無謬性が擴大されてきたことをまず検討したい。その好個の例として挙げられるのが、韋應物（七三五～七九〇?）である。<sup>(7)</sup>

つとに指摘がなされているように、韋應物は後世の白居易に影響を與えた詩人であつた。<sup>(8)</sup> 白居易は、「與元九書」（卷四五、元和十年・八一五）において韋應物の五言詩に對し「高雅閑淡、自ずから一家の體を爲す」と評しており、さらに後の寶曆元年（八二五）の五十四歳で蘇州刺史に着任すると「吳郡詩石記」（卷六八）を著し、當地にて名望を集めた韋應物の作を「雅韻」と評してそれを顯彰した。<sup>(9)</sup> 韋應物の作品は後世、「雅淡」と評される韋蘇州體<sup>(10)</sup>として獨自

の地歩を築くことになるが、その評價の先驅をなしたのが白居易であったのである。

## 二 慚愧の無謬性——韋應物

韋應物の官歴は、「歴官一十三政、三領大藩（官を歴ること一十三政、三たび大藩を領す）」（墓誌銘<sup>(1)</sup>）と概括される。このうち、壯年期の三度の郡守着任、すなわち、建中三年（七八二）の滁州刺史（下州・正四品下）、貞元元年（七八五）の江州刺史（中州・正四品上）、貞元五年（七八九）の蘇州刺史（上州・從三品）は注目されてよい。蘇州刺史の前にはまた、徳宗朝廷にあつて左司郎中（尚書省・從五品上）に着任し、「奉和聖製重陽日賜宴」（卷五・逢遇）の應制詩を物している。

韋應物の官歴においてまず觸れるべきは、永泰元年（七六五）三十一歳、洛陽丞にあつたとき、不法軍騎を杖刑に處したかどにより、従子で河南尉にあつた韋班とともに當時の東都留守に訴えられたことである。<sup>(2)</sup> 安史の亂後の餘燼なおくすぶる洛陽にあつて民生風紀の恢復に努めようとしたことが、かえって仇となつたのである。<sup>(3)</sup> この状況に際會して韋應物は、自身の正當なる立場にゆらぎがないこと

を繰り返し表明する。「示従子河南尉班・并序」詩（卷二・寄贈）では冒頭より、

拙直余恆守 拙直たるは 余が恆に守りしに  
公方爾所存 公方たるは 爾が存する所なり

と述べており、また「任洛陽丞請告」詩（卷八・雜興）では、比喩を用いながら「方たる鑿は圓を受けず、直たる木は輪と爲らず（方鑿不受圓、直木不爲輪）」と述べているのがそれである。このように、事態の齟齬がかえって己の「拙直」を強く自覺するに至らしめたのだが、それは取りも直さず彼にとって國家の選良たる意識はすでに明確にされていたからであつた。韋應物は同時期に「登高望洛城作」詩（卷七・登眺）を著しており、洛陽丞の任にあるものとしてその感懷を餘すところなく披瀝している。

1 高臺造雲端 高臺 雲端に造り

遐瞰周四垠 遐かに瞰る 周たる四垠

雄都定鼎地 雄都 定鼎の地

勢據萬國尊 勢は據る 萬國の尊

5 河嶽出雲雨

河嶽 雲雨より出で

土圭酌乾坤

土圭 乾坤に酌す

舟通南越貢

舟は通ず 南越の貢

城背北邙原

城は背す 北邙の原

9 帝宅夾清洛

帝宅 清洛を夾み

丹霞捧朝暾

丹霞 朝暾に捧ぐ

蔥龍瑤臺樹

蔥龍たり 瑤臺の樹

窈窕雙闕門

窈窕たり 雙闕の門

13

十載構屯難

十載 屯を構うること難く

兵戈若雲屯

兵戈 雲の若く屯す

膏腴滿榛蕪

膏腴 榛の蕪するに満ち

比屋空毀垣

比屋 空しく垣を毀つ

17

聖主乃東眷

聖主 乃ち東眷し

俾賢拯元元

賢を俾て 元元を拯わしめんとす

熙熙居守化

熙熙たり 居守の化

泛泛太府恩

泛泛たり 太府の恩

21

至損當受益

損に至れば 當に益を受くるべし

苦寒必生溫

寒に苦しめば 必ず温を生ず

平明四城開

平明 四城開き

稍見市井喧

稍や市井の喧たるを見る

25 坐感理亂跡

坐ろに感ず 理亂の跡

永懷經濟言

永く經濟の言を懷く

吾生自不達

吾が生 自ら達せず

空鳥何翩翻

空鳥 何ぞ翩翻たる

29

天高水流遠

天高く 水流ること遠く

日晏城郭昏

日晏く 城郭昏し

裴回訖旦夕

裴回して 旦夕に訖り

聊用寫憂煩

聊か用て 憂煩を寫ぐ

第一句から第十二句は高樓から望む洛陽の地勢を示す。そのうち、「帝宅は清洛を夾み、丹霞は朝暾に捧ぐ」は「九朝の都」「宅帝の郷」の偉容がなおも失われぬことを示し、續く第十三句から第十六句の戰亂による壞滅の様を一層浮き彫する。後半の第十七句「聖主乃ち東眷す」より、國家による東都復興の下、賢臣たるおのれには民生の救済を囑命されているなかで、韋應物はこれまでの唐王朝の治世から亂世への軌跡（理亂の跡）に思いを馳せつつ、ここに「永く經濟の言を懷」いてきたことを確認する。「理」は玄宗の治世を指すのであって、それは太平の世に生を受けた韋應物が常に懷舊する時代であり、あるいはこの「理

亂の跡」に時代の變轉とおのれの來し方を重ねたのでもあらう。他方ここで殊更に、自身は經世濟民の言辭を有するものであると述べるのは、さきに見た「萬言は經濟の略」の白居易の謂を取り上げるまでもなく、彼が股肱の臣として政用に付すべき志をここに新たに確認する必要があったからである。それでも、韋應物はこう述べる——「吾が生自ら達せず、空鳥何ぞ翩翻せん」と。個我の所在を常に見つめようとする韋應物の作には、この後もこれに類似した表現が仕官と退居を通じて絶えず繰り返される。さきに見た「拙直たるは余が恆に守りし」と述べていたのも、選良としての意識を保持しつつ個我の所在を放擲せずそれを見つめようとする、その表れであった。<sup>(14)</sup>

一體、官吏は、民生の安定を圖らなければならぬと同時に、自身が職能考課を受ける立場にもある。<sup>(15)</sup>この官僚制度が根源的に有する二律性のもとにあつて、韋應物においては、國家の選良としての意識はやがて聲高に叫ばれることなく影を潜めようになる。それに代わって表れるのが「慚愧の念」の表白である。次に「觀田家」詩（卷七・登眺）を見てみよう。

白居易の青年期における選良意識について（土谷）

1 微雨衆卉新 微雨 衆卉新たなり

一雷驚蟄始 一雷 驚蟄始む

田家幾日間 田家 幾ぞ日の間たる

耕種從此起 耕種 此れ從り起つ

5 丁壯俱在野 丁壯 俱に野に在り

場圃亦就理 場圃も 亦た理に就く

歸來景常晏 歸り來たりて 景常に晏たり

飲犢西澗水 犢に飲う 西澗の水

9 飢飮不自苦 飢飮 自ら苦まず

膏澤且爲喜 膏澤 且く喜びと爲さん

倉廩無宿儲 倉廩 宿儲無く

徭役猶未已 徭役 猶未だ已まず

13 方慚不耕者 方に慚ずらくは 耕さざる者

祿食出閭里 祿食 閭里より出ずるを

韋應物は、大曆末（七七八年ごろ）から建中初め（七八〇年ごろ）の四十四〜四十六歳ごろにかけて、鄆縣令として仕官したのち長安西郊の善福寺に退居した。右の作については、まずその系年が問題にならう。すなわち、孫望氏が出仕の際の作とし、他方、陶敏・王友勝兩氏が退居の作と



していることである。このように、兩者の間で判断が截然と分かれるそのことが如實に示しているように、この作には、第十三句から第十四句とそれ以前の句々との間に大きな斷絶が認められるのである。春の耕起播種の風景は整然としてどこまでも長閑であり、飢苦の心配なく慈雨のもと作物の成長が喜ばれる。翻つて、糧食は盡き徭役も止まぬなか、官位にある自身は「不耕の者」でありながら、その食祿は賦税によって賄われる。この矛盾背馳を如何にすべきか。「方に慚ず」と述べつつ慚愧の念のもとにこの二律背反を眞に引き受けようとするならば、ここに描かれた田園の風景はあるいはまた異なるものになっていたはずだろう。この作はつまり、慚愧の念を表白することによって問題を掲出しつつも、またそれを暫時留保しようとする試みであつたのである。<sup>(16)</sup>その試みを支えているのが、士大夫として慚愧の念を表白せざるをえないその當爲の無謬性にある。韋應物は自身が士大夫であること、言い換えれば、善政を敷くことを期待された選良であるとして、この田園風景のなかに己が所在を確認しようとしたのではないだろうか。

このように、社會問題の矛盾背馳を慚愧の念の表白に

よつて留保しようとする試みは、これ以降「三たび大藩を領」する間に、確實に示されるようになる。

名秩斯逾分 廉退愧不全

〔晚歸澧川〕卷六・行旅、比部員外郎

賦繁屬軍興 政拙愧斯人

〔答王郎中〕卷五・酬答、滁州刺史

身多疾病思田里 邑有流亡愧俸錢

〔寄李儋元錫〕卷三・寄贈、同

昔賢播高風 得守愧無施

〔始至郡〕卷八・雜興、江州刺史

仰恩慚政拙 念勞喜歲收

〔襄武館遊眺〕卷七・登眺、滁・江・蘇州刺史

ここで注意すべきは、「拙」の有り様である。かつて青年期にあつては「拙直たるは余が恆に守」ろうとしたために、官を辭して退居し自己の保養（養拙）に努めていたものであつた。しかし、ここでは「恩を仰ぐも政の拙なるを慚じ、勞を念いて歳收を喜ぶ」（「襄武館遊眺」詩）と述べる如く、郡主となるに及んでおのれの拙直を躊躇なく表明し



うるに至つたのである。政務を執るなかで本来抑制されるべきはずのものであつた自身生來の拙直を、韋應物は官歴を経るうちに、慚愧の念の表白のもとそれを己がものとして手懷け、それによつて大藩の太守たるべき士大夫の氣概を新たに見出そうとした。慚愧の念の表白によつてまた、士大夫たることの無謬性が擴大されてきたことを、ここに認めうるのである。この點を端的に示しているのが、彼の代表作の一である「郡齋雨中與諸文士燕集」詩（卷一・燕集）である。

## 1 兵衛森畫戟

兵衛 畫戟森たり

宴寢凝清香

宴寢 清香を凝らす

海上風雨至

海上 風雨至り

逍遙池閣涼

逍遙といひて 池閣涼し

## 5 煩痾近消散

煩痾 近ごろ消散し

嘉賓復滿堂

嘉賓 復た堂に滿つ

自慚居處崇

自ら慚ず 居處の崇きを

未睹斯民康

未だ睹ず 斯の民の康を

## 9 理會是非遣

理會して 是非遣り

性達形跡忘

性達して 形跡忘る

鮮肥屬時禁

鮮肥 たまた 屬ま時禁

蔬果幸見嘗

蔬果 幸いに嘗めらる

## 13

俯飲一杯酒

俯して飲む 一杯の酒

仰聆金玉章

仰ぎて聆<sup>き</sup>く 金玉の章

神歡體自輕

神は歡びて 體自ら輕く

意欲凌風翔

意は風を凌ぎて翔けんと欲す

## 17

吳中盛文史

吳中 文史盛んなり

群彥今汪洋

群彥 今汪洋たり

方知大藩地

方に知る 大藩の地

豈曰財賦疆

豈に財賦の疆と曰わんや

貞元五年（七八〇）蘇州刺史に着任した韋應物は、文會を開き詩酒の宴を設けて、文士を廣く招き入れた。これはその際の作である。第五句から第八句では「煩痾近ごろ消散し、嘉賓復た堂に滿つ。自ら慚ずの居處の崇きを、未だ睹ず斯の民の康きを」と述べる。蘇州という大藩の太守にあり、當地の文武官および人民を統べる地位にあつて、その表白せられる慚愧の念の差し向けられた先には、すでに個別性や具體性が失われていることは注意されてよい。すなわち、ここで發せられる慚愧の念を受け取る者は、嘉賓で

もなく、また自己でもなく、ましてや任命者たる皇帝でもない。差し向けられた者の存在しない慚愧の表白は、それ自體が斯くあらざるをえない當爲の無謬によつて支えられているのである。また、第十五句から第十六句では「神は歡びて體自ら軽く、意は風を凌ぎて翔けんと欲す」と述べられている。さきにすでに見たように、青年時代に洛陽丞のにあつた際には「吾が生自ら達せず、空鳥何ぞ翩翻せん」(「登高望洛城作」詩)と述べられていたことを想起するならば、爾來官歴を経るうちに唐王朝の選良として、また士大夫としてその理想的な姿——唐朝の太守のたるに相應しい、大柄で暢びやかな情趣を湛えた姿を築いてきたと言えよう。それはまた、この時期の韋應物の文學の特徴でもあつた。<sup>①</sup>白居易が「雅韻」の評のもと韋應物を顯彰したのも、正に韋應物が蘇州時代に成しえた文學に接し、それを一度は己がものにしようとしたがためであつて、唐王朝における士大夫たるべき姿を、この韋蘇州に見出だしていたのである。

### 三 慚愧の内攻化——白居易

白居易における慚愧の念について検討するにあたって、

ここではまずそれが皇帝權力に連なる選良の當爲としてあつたことを確認しておきたい。貞元十八年(八〇二)、白居易は、吏部侍郎である鄭珣瑜の主試のもと書判拔萃科に應じ、翌年に校書郎を授けられた。同年の陽春のころ、渭水の舟遊に借りて、貞元十六年の知貢舉であつた高郢と件の鄭珣瑜の二公より蒙つた厚恩に酬いるべく「汎渭賦」(卷三八・2806)を著した。この年十二月、高郢と鄭珣瑜はともに同中書門下平章事となつている。この作より、中段の第十九句から第二十六句、および後段の第五十七句以降を見てみよう。

19 凡讀儒書與履儒行者 率充賦而西來

雖片藝而必收兮 故不棄予之小才

23 感再遇於知己 心慚作而徘徊

登予名於太常兮 署予職於蘭臺

57 伊萬物各得其樂者 由聖賢之相契

賢致聖於無爲 聖致賢於既濟

61 凝爲和兮聚五福 發爲春兮消六沴

不我後兮不我先 適當我兮生之代

65 彼鱗蟲兮與羽族 咸知樂而不知惠

我爲人兮最靈 所以媿賢相而荷聖帝

69 樂乎樂乎 汎于渭兮詠而歸 聊逍遙以卒歲

第十九句以降では「凡そ儒書を讀むと儒行を履む者とは、率ね賦に充てられ西來す。片藝と雖も必ず收むるあり、故に予の小才を棄てず」と、正しく儒禮を備えた者が貢士に充てられ、自身は非才ながらも高郢と鄭珣瑜の二公の引き立てに預かったことを述べ、續いて「再び知己に遇するを感じ、心に慚作して徘徊す。予が名を太常に登せ、予が職を蘭臺に署かしむ」と、この度は登用されて校書郎（蘭臺）任用の厚遇を受けたことを謝しつつ、身に餘ることゆえ心中慚愧の念に堪えないと述べる。また、第五十七句以降では「伊れ萬物の各おの其の樂を得たるは、聖・賢の相契に由る。賢は聖を無爲に致し、聖は賢を既濟に致す」と主上と臣下の各々のあるべき立場を明らかにしたうえで、第六十七句から第六十八句では「我が人爲るは最も靈たり、以て賢相に媿じ聖帝を荷う所なり」と述べ、二人の賢相、すなわち高郢と鄭珣瑜に差し向けて慚愧の念を示しつつ、自身が皇帝の股肱耳目を負うに足る國家の選良で

あることを示した。白居易はこの作を通じて、高郢と鄭珣瑜の二公の肩越しに皇帝權力を垣間見たのであり、また自身もそれに連なるべき選良の一人としてある以上、股肱の臣に足るべき華麗なる措辭をこの作に惜しみなく施すことによつて、ここでは當面身を處すべき方途を二公に差し向けたのである。言い換えれば、この慚愧の表明は權力者に阿諛追從する類のものであったと解せよう。

いずれにせよ、渡邊氏が指摘するように、こういった慚愧の念の表白は、一義的に「授命者たる皇帝に對する恥」に歸納されるものである。これと類似するものとして、さらに元和三年（八〇八）に左拾遺に着任した際の「初授左拾遺」詩（卷一・0014）が挙げられる。次にこの作を見てみよう。

1 奉詔登左掖 詔を奉じて 左掖に登り

束帶參朝議 束帶して 朝議に參ず

何言初命卑 何ぞ言わん 初命の卑きを

且脫風塵吏 且く風塵の吏を脱す

5 杜甫陳子昂 杜甫と 陳子昂と

才名括天地 才名は 天地を括う

當時非不遇 當時 不遇に非ざるに  
尚無過斯位 尚お斯の位を過ぐる無し  
況余蹇薄者 況んや 余が蹇薄たる者

9

寵至不自意 寵の至ること 自ら意<sup>おも</sup>わざりき  
驚近白日光 白日の光に近きを驚き  
慚非青雲器 青雲の器に非ざるを慚ず

13

天子方從諫 天子 方に諫に従い  
朝廷無忌諱 朝廷 忌諱すること無し  
豈不思匪躬 豈に匪躬を思わざらんや  
適遇時無事 適遇 時に事無し

17

受命已旬月 命を受くること 已に旬月たり  
飽食隨班次 飽食 班次に隨う  
諫紙忽盈箱 諫紙 忽ち箱に盈てり  
對之終自愧 之に對して 終に自ら愧ず

左拾遺着任の命を授かるにあたって抱いた感慨は、第十一句から第十二句に示される。曰く「白日の光に近きを驚き、青雲の器に非ざるを慚ず」と、皇帝を間近に仰ぐ立場にありながらおのれの才覺力量の足りぬことを恥じるのであり、ここでは「授命者たる皇帝に對する恥」が示されて

いることは疑いえない。しかしながら、この作においてな  
お注意すべきは、末尾の第十七句から第十八句に「諫紙忽  
ち箱に盈つ、之に對して終に自ら愧ず」と述べる如く、再  
度にわたって慚愧の念が示されていることである。この二  
度に互る慚愧の念の表白は、いったい何を意味するのだろ  
うか。

この作ではまた、文才によつて名を馳せた杜甫と陳子昂  
に言及されていることがこの問題を解く關鍵となる。第五  
句から第八句には「杜甫と陳子昂と、才名は天地を括<sup>お</sup>う。  
時に當りて不遇に非ざるに、尚お斯の位を過ぐるること無き  
なり」と述べる如く、肅宗より左拾遺を授けられた杜  
甫、あるいは則天武后より右拾遺を授けられた陳子昂は、  
各々が天地を覆うほどの文才を備え皇帝の厚遇を受けて任  
官したものではあったが、のちいづれも皇帝の親授による  
任命は生涯にわたつて二度となかったのである。そもそ  
も、左拾遺は皇帝に對する諫言を行うことをその職掌とす  
る一方、諫言の片言隻語が誤つて舌禍を招くようなこと  
になれば、かえつて我が身を危うくする立場でもある。第十  
五句から第十六句には「命を受くこと已に旬月たり、食に  
飽いて班次に隨う」とあつて、あるいは要職にありながら

無爲徒食であることを恥じているようにも見えるが、これはむしろ左拾遺の職が根源的に持つ二律背反の危うさを見るなかで、ここでは慚愧の念の表白によつて、その矛盾を棚上げしようとしているのではないだろうか。かくして、この作においては端無くも、白居易の二つの側面が浮き彫りにされたのである。すなわち、皇帝の親任に應え左拾遺の職務を精勤勵行しようとする面と、不用意な瑕疵を招かぬよう甘んじて尸位素餐を引き受けようとする面である。

左拾遺という職に根源的に有する矛盾を乗り越え、職務にあたつて本来の役割を果たすべく、白居易は着任に前後して「君―臣」の關係、あるいは「臣―民」の關係について、幾度にもわたつて確認しようとして試みている。例えば、「賀雨」詩（卷一・0001、元和四年・八〇九）では、「君は明を以て聖と爲し、臣は直を以て忠と爲す。敢えて其の始有るを賀し、亦た其の終有るを願う（君以明爲聖、臣以直爲忠。敢賀有其始、亦願有其終）」と述べ、あるいは「哭孔戡」詩（卷一・0003＝那波本では「孔戡詩」）に作る、元和五年・八一〇）では、「賢たる者は生民の爲にす、生死は懸けて天に在り（賢者爲生民、生死懸在天）」などと述べるのがそれである。そもそもこの種の見立ては、元和元年の應舉に向けて著さ

れた「策林」中にすでに用意されていたものであった。

苟臣管見之中、有可取者、陛下取而行之。苟臣芻言之中、有可採者、陛下採而用之。則聞之者必曰、如某之言、如某之見、猶且不棄、況愈於某之徒歟

苟しくも臣が管見の中、取るべき者有らば、陛下取りて之を行わん。苟しくも臣が芻言の中、採る可き者有らば、陛下採りて之を用いん。則ち之を聞く者必ず曰く、某の言の如き、某の見の如きは、猶お且つ棄てられず、況んや某に愈るの徒に於いてをや。

〔策林〕第七十「納諫」、卷六五・3489、元和元年・八〇六

しかし、事態は一層深刻であつた。「觀刈麥」詩（卷一・0006、元和二年・八〇七）、「采地黃者」詩（卷一・0042、元和八年・八一三）などに示される税吏の苛斂誅求や農民の飢苦、あるいは「宿紫閣山北村」詩（卷一・0021、元和五年・八一〇）などに示される宦官の横暴搾取といった、現實の過酷なる慘状を見聞するに及んで、白居易は慚愧の念を深くする。

21 今我何功德 今我れ 何の功德かあらん

曾不事農桑 曾て農桑を事とせず

吏祿三百石 吏祿 三百石

歲晏有餘糧 歲晏くれて 餘糧有り

念此私自愧 此を念おもへば 私かに自ら愧じ

盡日不能忘 盡日 忘るる能わず

〔觀刈麥〕詩、卷一・006、元和二年・八〇七

13

愧茲勤且敬 茲の勤にして且つ敬なるに愧じ

藜杖爲淹泊 藜杖 爲に淹泊す

言動任天真 言動は 天真に任ずも

未覺農人惡 未だ農人の惡きを覺えず

〔中略〕

21

自慚祿仕者 自ら慚ず 祿仕せる者

曾不營農作 曾て農作を營まず

飽食無所勞 飽食 勞わづう所無し

何殊衛人鶴 何ぞ衛人の鶴に殊れり

〔觀稼〕詩、卷六・0250、元和七年・八二二

9

昔余謬從事 昔余謬りて 從事するや

內愧才不足 内に愧はずらくは 才の足らざるを

連授四命官 授を連ねること 四たび官を命ぜられ

坐尸十年祿 尸に坐まずこと 十年の祿たり

〔納粟〕詩、卷一・0047、元和七年・九一八・八二二・八二四

17 幸免飢凍苦 幸いに飢凍の苦を免れ

又無壟畝勤 又た壟畝の勤無し

念彼深可媿 彼を念おもひて 深く媿はずべし

自問是何人 自ら問う 是れ何人ぞ

〔村居苦寒〕詩、卷一・0046、元和八年・八一三

これらの作はおしなべて卷一「諷諭」に収める詩篇〔觀稼〕詩を除く〕であり、その趣旨はこれらに前後して著された「新樂府」五十首（元和四年・八〇九ごろ）の「捕蝗」（卷三・0134）「杜陵叟」（同・0152）「賣炭翁」（卷四・0154）、あるいは「秦中吟」十首（元和五年・八一〇）の「重賦」（卷二・0076）などといった作に連なるものである。かくして、ときに大言壯語をもって叫ばれ、ときに美辭麗句をもって表された國家の選良たる意識はここにおいて沈潜し、代わって慚愧の念をもって自己の内面を問い詰めるようになった。言い換えれば、慚愧の念が白居易の精神を内攻するようになったのである。花房氏がつとに指摘するように「一個の

人間としての意識」が白居易にとってより重要になったのであり、慚愧の念を表白することによって、個我的内發的にして實質的な意識の所在を問ひ詰めるようになったのである。かくあればこそ、彼の一連の諷諭詩はその實踐の具現であつたのであり、諷諭詩を示すことが國家の選良として目下履行すべき最善の方途であつたのである。これについては、白居易自身がそれをすでに言明していることは注意されてよい。「與楊虞卿書」(卷四・280、元和十年・八一〇)では次のように述べている。

當其在近職時、自惟賤陋、非次寵擢、夙夜腆愧、思有以稱之。性又愚昧、不識時之忌諱、凡直奏密啟外、有合方便聞於上者、稍以歌詩導之、意者欲其易入而深誠也。

其れ近職に在りし時に當り、自ら賤陋たるを惟うも、次に非ざる寵擢ありて、夙夜腆愧し、以て之に稱<sup>かな</sup>うる有るを思う。性も又た愚昧たり、時の忌諱を識らず、凡そ直奏密啟の外、方便に合して上に聞ゆる者有り、稍や歌詩を以て之を導く、意は其れ入ること易くして深く誠めんと欲すればなり。

白居易の青年期における選良意識について(土谷)

さきに見た「初授左拾遺」詩(元和三年・八〇八)と右に引いた一文とを突き合わせてみるならば、この段において諷諭詩をもつて教導する(歌詩を以て之を導く)に至つたその經緯を具に見て取ることができよう。すなわち、右文に見える「夙夜腆愧し、以て之に稱うる有るを思う」の前後については、詩においても同様に、非才たる自身の格別の拔擢に深く恥じ入ると述べてられていた。慚愧の念の表出のもとにあつてこの兩者はほぼ一致するものであり、その姿に大きな隔たりはない。一方、ここで注意されるべきは、それに續く後半部である。詩では「命を受くこと已に旬月たり、食に飽いて班次に隨う。諫紙忽ち箱に盈つ、之に對して終に自ら愧ず」と述べ、慚愧の念のもと甘んじて尸位素餐を引き受けようとした姿があつた。しかし、右文ではもはやその姿は認められず、それに代わつて「意は其れ入ること易くして深く戒めんと欲すればなり」と述べられているのである。この謂は次に掲げる「新樂府」序に見える一文と、正に吻合するものである。

其辭質而徑、欲見之者易論也。其言直而切、欲聞之者深誠也。



其の辭の質にして徑たるは、之を見る者論し、易からんと欲すればなり。其の言の直にして切たるは、之を聞く者の深く、誠にめんと欲すればなり。

白居易の諷諭詩の精華の一である「新樂府」五十首は、各篇の成作時期こそ違えども、そこには國家の選良としてそれに相應しい職責を果たそうとする意識があつたことは言うまでもない。その意識というのも、白居易はここに至つて、否が應にも自己に差し向けられ、自己の精神を内攻する慚愧の念によつて突き動かされ、支えられていたものであつたのである。

#### 四 結語

國政に與る選良は、その選良たるべき意識を確實に持ちながらも、その意識を聲高に叫ぼうとすればそうするほど、かえつて自身を隘路に閉じ込めることになり、結果、股肱の臣たらんとする立場は危うくなる。官僚制度が根源的に有する二律性のもとにあつて、官歴を経るなかで選良たる意識はやがて沈潛するようになり、代わつて目下の矛盾背馳を慚愧の念の表白によつて暫時留保するようになる

のである。この慚愧の念の表白を裏側から支えていたのが、士大夫たるころの當爲の無謬性である。

そのうえで、韋應物は、三藩の太守を経るなかで、仕官と自己本來の「拙直」の矛盾を慚愧の念の表白によつて止揚し、それによつて、士大夫たる自身の在り様を擴大させた。大柄で暢びやかな太守の文學がここに生まれたのである。他方、白居易は、左拾遺の就任前後において、社會現實に接したことを通して、自己に内攻する慚愧の念に對し個人の内發的・實質的な意識を付與し、これによつて國家の選良としての職責を果たすべく問題の矛盾背馳に當たろうとした。「新樂府」や「秦中吟」を代表とする諷諭詩がここに誕生した所以である。

白居易と韋應物の影響關係を考えるならば、白居易はすでにその青年期から韋應物より太守の文學を感得するものであつたが、一方で「韋蘇州の歌行は、才麗の外、頗る興諷に近し」（『興元九書』）とも述べるように、韋應物の文學に諷諭の面を備えているとも認めている。韋應物の作品において諷諭とは如何なるものであつたのか。白居易においては、それを如何に見つめ、如何におのれのものとしようとしたのか。本稿は、それを探る足がかりとなるものである。

注

(1) 白居易の作品について、朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八）を底本とし、謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六）、同『白居易文集校注』（中華書局、二〇一一）を適宜参照した。また、作品番號については、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、一九六〇）に収める「總合作品表」に従い、白居易の経歴と作品の系年については、朱金城『白居易年譜』（上海古籍出版社、一九八〇）に據った。

(2) 「選良」については、三國呉の韋昭（韋曜、字は弘嗣、？～二七三）の「博奕論」に見える。韋昭が太子中庶子るとき、崔穎なる臣下もまた東宮にあつて彼は博奕（雙六）を好んだため、太子の孫和がその無益を思い韋昭にそれを論じさせた。そのなかで、次のように述べている。「方今大吳受命、海内未平、聖朝乾乾、務在得人。勇略之士、則受熊虎之任、儒雅之徒、則處龍鳳之署。百行兼苞、文武竝驚。博選良才、旌簡髦俊。設程試之科、垂金爵之賞。誠千載之嘉會、百世之良遇也。當世之士、宜勉思至道、愛功惜力、以佐明時。使名書史籍、動在盟府。乃君子之務、當今之先急也」（『文選』卷五二、中華書局、一九八六）。「良才」は優れた人材のことであり、「能臣」たることを期待された人物。「旌簡」は選ぶこと、「髦俊」は優れた人物。當時の士人は「宜しく勉めて至道を思い、功を愛み力を惜みて、以て明時を佐くべし」とある如く、國家にとって有爲の人材が切望されており、「名をして史籍に書し、

勳をして盟府に在らしめん。乃ち君子の務、當今の先急なり」とある如く、斯様な人材を拔擢登用することが爲政者の目下の急務であった。

(3) 『史記』卷二七「天官書」の「南宮朱鳥」條の正義に見える。

(4) 花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七二）「第三章 文學の立場 四 文學の基盤」。氏は、「適意」詩（卷六、0236）に見える「三年作諫官、復多尸素羞」を擧げて、「詩道」の文學は、白居易の意識の底邊に、深く擴がっていた「尸素」の「愧」に支えられていたのである（409・410頁）と指摘する。さらにまた「内に向かう「不才」の「愧」（416頁）を指摘し、「元九に與うるの書」を引いて「愚拙」の者という自卑の意識も、また常に離れなかった」（四一七頁）と述べる。

(5) 渡邊信一郎「白居易の慙愧——唐宋變革期における農業構造の發展と下級官人層」（『京都府立大學學術報告・人文』第三十六號（一九八四）。引用文は第一章「慙愧の諸相とイデオロギー的背景」に見える。氏はさらに、當時の社會構造の變化（商業流通の發達、貨幣經濟の浸透）に伴う傳統的な四民分業の解體や、六朝期の清的理想の變質を指摘し、「詩人の慙愧は、この四民分業論・清的理想の變質・解體の中で、祿仕者＝官人としての本來のあり方に動搖が激しはじめた時、あたかもその根底をなした新しい農民との邂逅によって發露するのである」（七七八頁）と述べている。また、第四章「唐後半の階級構成と慙愧の實體」では、白居易の慙愧について「自己の農業生産力的基盤を確立して自立して小農民層を目的

あたりにして、下級官人層が、自らの政治理念の變革と經濟基盤の變容への對處に直面せざるを得ない状況における、その苦衷の表白に他ならない」と述べる。

- (6) 選良を統べる皇帝自身もまた慚愧の念を表白することを想起せよ。一例として、太宗「水潦大赦詔」に「良由誠未動天、德不被物、興言念此、撫已多慚」(『全唐文』卷五、中華書局)と述べる。

- (7) 前掲注(5)所掲論文において、渡邊氏は白居易の慚愧の念の先驅者として、韋應物と錢起(七一〇?～七八二?)を挙げる(四～五頁)。韋應物については、本稿で検討を進めるものである。

- (8) (a) 赤井益久「韋應物と白樂天——諷諭詩を中心として」(『國學院雜誌』第八一卷・第五號、國學院大學、一九八〇)。(b) 同「白居易と韋應物に見る『閑居』」(『國學院雜誌』第九四卷・第八號、一九九三年)。(c) 同「先行文學と白居易——韋應物を中心として」(『白居易研究講座第二卷・白居易の文學と人生Ⅱ』勉誠出版、一九九三)。

- (9) 筆者は、これに關して次の小論を著したことがある。土谷彰男「白居易・劉禹錫における韋應物の『雅韻』の受容について——白居易『警策』評を手がかりとして」(『中國文學研究』第三十三期、二〇〇七年)。

- (10) 明・高棟「唐詩品彙」「總序」に「大曆、貞元中、則有韋蘇州之雅澹、劉隨州之閑曠、錢郎之清曠、皇甫之冲秀、秦公緒之山林、李從一之臺閣、此中唐之再盛也」(中華書局、

二〇一五)とある。

- (11) 丘丹「唐故尚書左司郎中蘇州刺史京兆韋君墓誌銘並序」(『韋應物校注・增訂本』上海古籍出版社、二〇一二所收)。なお、韋應物の作品は、同書を底本とする。

- (12) 傅璇琮氏は、このときの東都留守は王縉である可能性を指摘しており(『韋應物系年考證』『唐代士人叢考』中華書局、一九八〇所收)、孫望氏は、これに加えて蘇震の河南尹着任(『新唐書』卷一二五)を挙げるも、「恐らく兩人の着任は履行されなかった」と述べる(『韋應物詩系年校箋』中華書局、二〇〇二)。

- (13) 赤井益久「韋應物の屏居」(『漢文學會會報』第三十號、一九八四)に詳しい。

- (14) 赤井氏は、前掲注(8)の所掲論文(b)において、「拙直」に類する表現として「頑鈍」「愚蒙」「孱鈍」を取り上げそれらは韋應物の作に多く見られるとしたうえで、「世に受け入れられぬ反價値の語が、多く出世における不適應を指す一方で、否定されずむしろ保持されるものとして自覺されている。處世の拙劣さを言うばかりでなく、自らの矜持という語でもある」と指摘する。

- (15) 元結「春陵行」(『全唐詩』卷二四一)に「安人天子命、符節我所持。州縣忽亂亡、得罪復是誰。逋緩違詔令、蒙責固其宜。前賢重守分、惡以禍福移。亦云貴守官、不愛能適時。顧惟孱弱者、正直當不虧。何人采國風、吾欲獻此辭」とある。これについては、別稿を起こすつもりである。

(16) この作はあるいは、縣令レベルにおいても當時の巡察制に則り、その領地の農桑や倉儲について巡察を行った際の感懷を記したものであるかもしれない（『唐六典』三府督護州縣官吏卷第三十）。

(17) 筆者は、これに關して次の小論を著したことがある。土谷彰男「中唐初期における蘇州文壇の形成についての一考察——文學理論の展開と五言古體詩について——」（『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』研文出版、二〇〇六）。

(18) 花房氏は「醉後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡張大賈二十四先輩昆季」詩（卷十二、元和四年・八〇九）に見える「月慚諫紙二百張」句を引いて、「月ごとに與えられる二百帳（ママ——筆者注）の諫紙を、費やし盡くさずして、上奏すべきことを怠り、義務を全うし得ざることに『慚』を意識するのである」と述べ、續いてまた、本句を引いて「かつてこの職責にあった、杜甫や陳子昂に比して、はるかに才薄き者が、憲宗の不次の拔擢にめぐりあつたものの、その恩寵に報いざるを思いつつ、『愧』を歌っていた」と述べる。

(19) この部分については、「與元九書」（卷四五、元和十年・八一五）にも、次の通りこれに類する記述が見られる。「僕當此日、擢在翰林、身是諫官。月請諫紙啓奏之外、有可以救濟人病裨補時闕而難於指言者、輒詠歌之、欲稍稍遞進聞於上」。

白居易の青年期における選良意識について（土谷）

\* \*

作者：土谷 彰男

Author: TSUCHIYA Akio

標題：白居易青年時期的精英意識——就「慚愧」の表述、

與韋應物進行對比

Title: Bai Juyi's Elitism in his Youth —— in Comparison with Wei Yingwu about their Expressions of Shame ——

摘要：本稿圍繞白居易青年時期的精英意識展開，探討了

在唐代士大夫階層的精英意識結構內，以身為士大夫的義務性和正當性為前提，表述慚愧之情的行為，並論述了白居易在面對身為臣子的自我意識與社會現實之間存在的矛盾時所採取的做法。作為對比，首先以韋應物（七三五—七九〇？）為例進行了考察。在晚年任蘇州刺史期間，韋應物身為士大夫的精英意識以表述自身慚愧之情為基礎被進一步正當化，俱有大氣暢達這一個人特色的太守文學也隨之誕生（慚愧的正當性）。本稿在此基礎上對白居易進行了考察。出於慚愧之情，白居易表露了自身對任命者即

皇帝所懷的愧疚感，而在深入接觸社會現實的過程中，其自發的、俱有實質性的個人意識逐漸融入到這種慚愧之情當中（慚愧的內化），諷諭作品之一的《新樂府》五十首也由此誕生。

**關鍵詞**：白居易 韋應物 慚愧之情 精英意識 諷諭詩  
新樂府